

白石町文化財調査報告書第6集

とお の え いっ ほん まつ こもり
遠ノ江一本松籠遺跡

平成5年3月

佐賀県白石町教育委員会

白石町文化財調査報告書第6集

とおのえいっほんまつこもり
遠ノ江一本松籠遺跡

白石町位置図



平成5年3月

佐賀県白石町教育委員会

序

この報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の施行に先がけて、平成3年度に発掘調査を実施した遠ノ江一本松籠遺跡の調査報告書です。

白石町では昭和62年度から本格的な文化財調査を開始し、杵島山丘陵東山麓部を中心として弥生時代から奈良時代にかけての古代の様相が、少しずつ明らかになってきています。

遺跡は我々祖先の生活の営みを具体的に示してくれる貴重な文化遺産です。町民の共有財産として、未来に保存していくことは現代を生きる我々の重大な責任であります。

今回の発掘調査によって得られた貴重な成果が、白石町の歴史を教えてくれる資料となり、文化財に対する理解と啓蒙の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりご理解とご協力を賜りました佐賀県農林部・佐賀県教育委員会・白石町土地改良区（課）並びに地元関係各位に、心からお礼を申し上げます。

平成5年3月

佐賀県白石町教育委員会

教育長 吉田 忠

例 言

1. 本書は農業基盤整備事業に伴い、平成3年度に実施した遠ノ江一本松籠遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は佐賀県農林部の委託と、国庫補助金をうけて白石町教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測は調査員及び補助員が実施した。
4. 木棺墓出土人骨の実測及び鑑定は、長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸助教授並びに同教室の方にお願ひした。
5. 遺構及び出土遺物の写真撮影は調査員が実施した。
6. 遺物の洗浄・復元・実測・製図は調査員及び整理作業員が実施した。
7. 調査においては、佐賀県教育委員会文化財課のご支援・ご協力を受けた。
8. 本書の執筆・編集は渡部俊哉が行った。

凡 例

1. 遺構番号については、各遺構毎に一連番号とし、その前にSK=土壌、SD=溝、SP=土墳墓、P=柱穴の分類記号を標記した。
2. 挿図中に用いた方位は、磁北を示す。
3. 図版内の遺物写真については、挿図と対照できるように()内に、挿図番号と挿図内遺物番号を併記した。

本文目次

I 序説	1	III 調査の記録	6
1. 調査にいたる経緯	1	1. 調査地区の概要	6
2. 調査体制	1	2. 遺構と遺物	6
II 遺跡の位置と環境	2	(1)土壌	6
1. 遺跡の位置	2	(2)溝	8
2. 歴史的環境	2	(3)土壌墓	9
		(4)木棺墓	10
		(5)その他の出土遺物	11
		IV 小結	12

挿図目次

Fig. 1	町内主要遺跡図	3
Fig. 2	調査地区位置図	4
Fig. 3	S K002・006・007実測図	6
Fig. 4	S K002出土遺物実測図	7
Fig. 5	S K006・007出土遺物実測図	7
Fig. 6	S K031・032実測図	7
Fig. 7	S K031・032出土遺物実測図	8
Fig. 8	S D001実測図	8
Fig. 9	S D001出土遺物実測図	9
Fig. 10	S P01実測図	9
Fig. 11	S P02実測図	10
Fig. 12	S P03実測図	11
Fig. 13	S P03出土遺物実測図	11
Fig. 14	P005・015出土遺物実測図	11
Fig. 15	その他の出土遺物実測図	12
Fig. 16	遺構配置図	13~14

図 版 目 次

- P L. 1 1. 調査地区全景 (東から)
2. 調査地区全景 (西から)
3. S P01・02周辺 (東から)
4. S P01・02 (東から)
- P L. 2 1. S K006 (南から)
2. S K007 (東から)
3. S K031 (北から)
4. S K032 (北から)
- P L. 3 1. S K032遺物出土状況 (南から)
2. S D001 (南から)
3. P005 (南から)
4. P015 (東から)
- P L. 4 1. S P01 (南から)
2. S P01人骨出土状況 (南から)
3. S P01
4. S P01人骨取上げ後 (南から)
- P L. 5 1. S P02 (南から)
2. S P02人骨出土状況 (南から)
3. S P02人骨取上げ後 (南から)
- P L. 6 1. S P03人骨出土状況 (北から)
2. S P03人骨取上げ後 (北から)
3. S P03墓壇内遺物出土状況 (北から)
4. S P03墓壇内遺物出土状況 (北から)
- P L. 7 S K002・031・032、S D001、S P03出土遺物
- P L. 8 S P03出土遺物
- P L. 9 P005・015、包含層出土遺物

I. 序 説

1. 調査にいたる経緯

白石町では昭和51年度より農業基盤整備事業が実施されているが、白石西第3工区においては、平成3年度に9.0haの事業が計画された。このため、平成2年度に佐賀県文化財課の協力を受け、水路計画部分を事前に文化財確認調査を実施したところ、木棺墓1基、近世陶磁器の出土があり、遺跡の存在が確認された。確認調査結果を基に、佐賀県農林部・佐賀県教育委員会・白石町土地改良区（課）・白石町教育委員会の四者で協議を重ねた結果、削平される水路部分について発掘調査を行い記録保存を図ることになった。

発掘調査は佐賀県農林部の委託と国庫補助金を受けて、白石町教育委員会が平成3年度に実施した。

2. 調査体制

調査主体	白石町教育委員会
事務局	教 育 長 吉 田 忠 社会教育課長 副 島 繁 社会教育係長 栗 山 和 久 社会教育課主事 武 富 健 〃 瀬戸口 玲子
調査員	社会教育課主事 渡 部 俊 哉
調査指導	佐賀県教育委員会文化財課
発掘・整理 作 業 員	稲富敬子・田中順子・洲上房江・山口登美子・副島武子・江口京子・ 溝口京子・前田シツヨ
調査協力	地元各位・佐賀県農林部・白石町土地改良区（課）

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

遠ノ江一本松籠遺跡は、白石町大字遠ノ江字一本松籠に位置する。白石町の中心部から約1.5km南側、標高約1.3mを測る水田地帯に広がる。

この地域がいつ陸地化されたかは不明であるが、天仁3(1110)年の「大政官符案」には、現在の白石町今泉地区に存在した大宰府観世音寺の荘園「中津荘」の四至として、「東限海、南限七条日自里北畦、西限馬田東畦、北限大江(六角川)」と記されていることから、平安時代末期まではいまだ陸地化されていないことが分かる。江戸時代初期には、佐賀藩初代藩主鍋島勝茂が佐賀県立農業高等学校敷地内に「屋形」を造営させ、遺跡の所在地周辺で盛んに鷹狩を催しているため、少なくとも戦国時代にはある程度の陸地化が進行していたものと推定される。

2. 歴史的環境

白石平野における古代の遺跡分布は、主に杵島山丘陵の東側山麓部に集中する傾向にある。このことは、白石平野が西側から東側へと自然に陸地化していったという地形的な条件に依るところが多いと考えられる。

現在までの時点で発掘調査によって判明している状況を述べると、縄文時代の遺跡については不明な点が多い。高城跡西方の船野遺跡において晩期の甕・鉢等の出土があるものの、明確な遺構に伴うものではなく、またその数も少量である。本格的な集落が形成されるのは、弥生時代からである。中期前半から中期後半にかけて船野遺跡が大規模な集落として登場する。軟弱地盤という白石平野独特の地理的条件により、横木・枕木を使用する「根がらみ工法」や円形あるいは方形の礎板を使用した高床式建物跡のみが検出されている。全貌は未確認であるが全長約90cmを測る長方形の大きな礎板を使用した高床式建物跡1棟も確認されている。続く後期になると、高城跡南方の湯崎東遺跡が形成され、船野遺跡と同様に「根がらみ工法」を使用する高床式建物跡が検出されているが、「筏基礎工法」をとる一問四方の高床式建物跡も確認されており、地盤沈下に対する技術的な進歩のあとが窺える。

妻山丘陵において、昭和36年の林道工事の際に数基の甕棺と箱式石棺・石蓋土墳墓各1基が発見されている。

古墳時代の遺跡としては、前期～後期の湯崎東遺跡、後期の久治遺跡・多田遺跡が知られている。これら各遺跡からは住居跡が検出されておらず不明な点が多いが、湯崎東遺跡からは陶器の産物が検出されている。

杵島山系から延びる小丘陵上には多数の古墳が築造されているが、前期に溯る古墳は知られていない。5世紀末から6世紀初頭の古墳として、妻山神社西方の妻山古墳群1号墳や船野山丘陵の船野山古墳群1号墳(通称、かぶと塚-白石町史跡)が知られている。船野山古墳群1

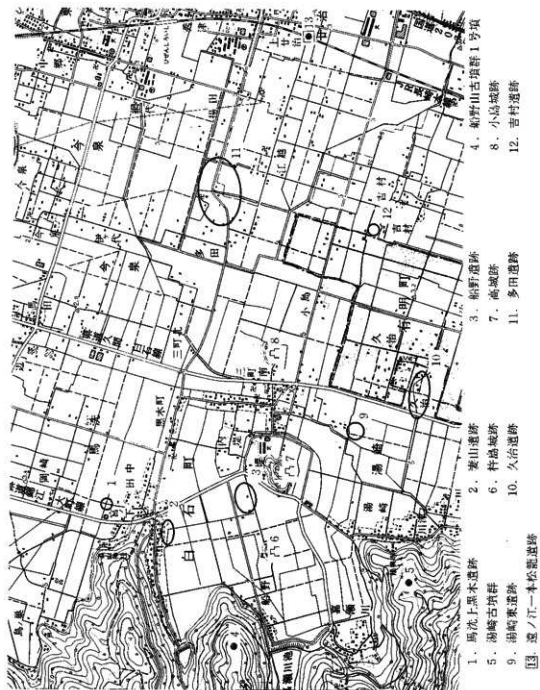


Fig. 1 町内主要遺跡分布図 (S=1/25,000)

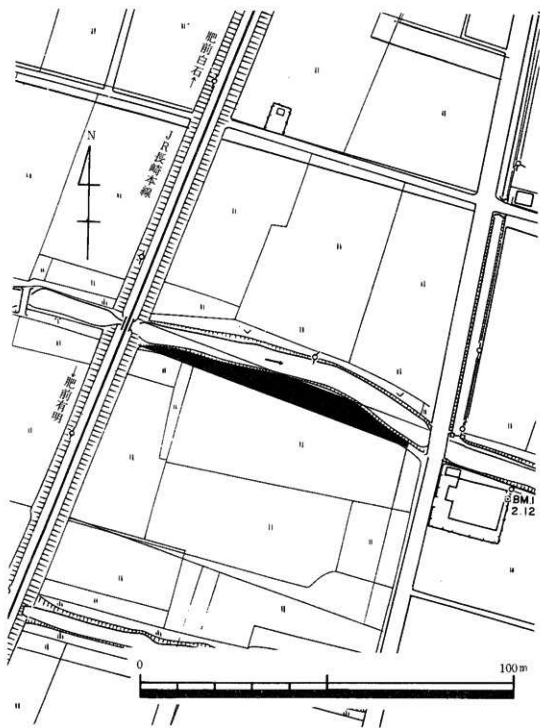


Fig. 2 調査地区位置図 (S=1/1,000)

号墳については、昭和48年に県文化課の調査により、径約40mの円墳に内包される全長約8mの単室両袖式横穴式石室から鉄刀・鉄剣・鉄鏃・短甲片等が出土し、墳丘からは線刻のある円筒埴輪片も採取されている^⑦。湯崎地区には標高約86mを測る丘陵上には、全長約40mの前方後円墳を中心に4基の小円墳を伴う湯崎古墳群が築造されている^⑧。詳細は不明であるが、6世紀代と考えられる。この他、後期の群集墳が多数形成されていたのだから、大多数はみかん園造成の際に消滅してしまい、当初の姿を留めるのは野柄古墳群1号墳(白石町史跡)等少数である^⑨。

奈良時代の遺跡として、湯崎東遺跡・久治遺跡・多田遺跡がある。湯崎東遺跡からは無記録であるが付札木簡1本と、多田遺跡からは「大神部」と記される木簡3本、墨書土器等が出土しており、杵島山東方の中心的な集落であったことが窺える。

鎌倉時代には、現在の多田地区に九条家領であった「大田荘」が存在したとされるが、多田遺跡の発掘調査の結果ではこのことを明確に物語る遺物等は確認できなかった。

中世以降については、余り発掘調査が実施されておらず不明な点が多い。戦国時代末期には高城主平井経治と佐賀の籠造寺隆信との間で4度にわたる激しい戦いが繰り広げられたが、高城跡北西部にあたる船野遺跡内から高城内濠跡の一部が検出されている。吉村遺跡からは17世紀後半～18世紀前半の唐津焼・伊万里焼の肥前陶磁器が多数出土している^⑩。

〔文献〕

- ① 竹内理三編『平安遺文』古文書編第四巻 1719号
- ② 『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 10』佐賀県教育委員会 1992年
- ③ 『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 8』佐賀県教育委員会 1990年
- ④ 『白石町史』 1974年
- ⑤ 『多田遺跡-A・B・C・D地区-』白石町教育委員会 1993年
『多田遺跡-E・F・G・H・I・J地区-』白石町教育委員会 1992年
- ⑥ 『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 4』佐賀県教育委員会 1986年
- ⑦ 文献③に同じ
- ⑧ 佐賀県教育委員会により、墳丘平面実測図が作成されている。
- ⑨ 『白石町の文化財』白石町教育委員会 1988年
- ⑩ 『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 6』佐賀県教育委員会 1988年

III. 調査の記録

1. 調査地区の概要

東西方向の小水路計画部分を発掘調査したが、耕作土を除去すると直下に遺構面が現れた。遺構としては土壇、溝、柱穴の他に木棺墓3基が検出された。木棺墓の出土状況を見ると、調査地区はかなり削平を受けていることが判明した。

2. 遺構と遺物

(1) 土壇

SK002 (Fig. 3)

東西長0.7m、南北長0.5mを測る不整形円形の小土壇で、深さは0.4～0.5mで東側がやや深い。

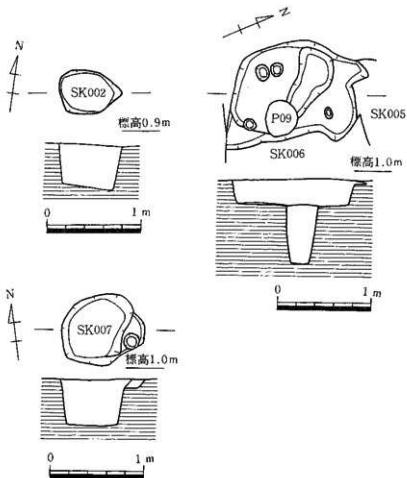


Fig. 3 SK002-007実測図 (S=1/40)

SK002出土遺物 (Fig. 4)

復元口径10.2cm、器高6.0cmの染付碗で、外面に山文を描き、高台内面には崩れた書法で「大明年製」と銘記する。

SK006 (Fig. 3)

東西長1.5m、南北長1.0mを測る不整形の土壇で、埋設後にP009が掘られている。深さは0.2mだが、底部ほぼ中央から更に0.6mの掘り込みがなされている。

SK006出土遺物 (Fig. 5-1)

復元口径10.8cm、器高3.0cmを測る土師器坏で、糸切り底。体部は横ナゲ調整、底部内面はナゲ調整。

SK007 (Fig. 3)

東西径0.9m、南北径0.8mを測る不整形の土壇で、深さは0.5m。東側が二段掘りを示す。

SK007出土遺物 (Fig. 5-2)

須恵質の鉢であるが、小片のために口径等は不明である。口縁端部外面を下方に折り曲げる。

SK030 (Fig. 6)

長径0.7m、短径0.5mを測る楕円形の土壇で、SK030とP077に切られている。深さは0.3m。

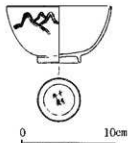


Fig. 4 SK002出土遺物実測図 (S=1/4)

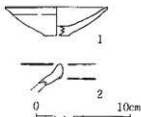


Fig. 5 SK006-007出土遺物実測図 (S=1/4)

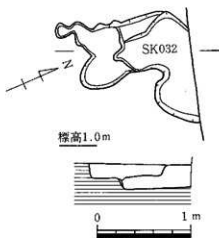
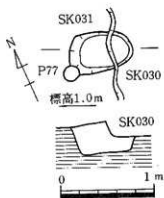


Fig. 6 SK031-032実測図 (S=1/40)

SK031出土遺物 (Fig. 7)

1は陶器壺で、復元口径11.2cm。頸部から口縁部にかけては厚さは極端に薄く、口縁端部は外方に屈曲する。肩部外面にヘラ書き波状文が施される。口縁部内面は横方向タタキの上に横ナデ調整、胴部内面は格子状タタキの上に横ナデ調整。2は瓦質壺か。復元口径22.0cm。口縁部外面は縦横方向のハケ目、内面は横方向ハケ目。

SK032 (Fig. 6)

全体を確認できなかったが、検出された範囲内では東西長1.2m、南北長1.3mを測る不整形の土壌で、二段掘りを示し深さは0.3m。

SK032出土遺物 (Fig. 7)

瓦質脚付鉢で、復元口径19.4cm、器高8.9cm。口縁部が内側へ大きく屈曲し、逆台形の脚が付く。回転ナデ調整。

(2)溝

SD001 (Fig. 8)

調査地区を直交するかたちで検出された溝で、約2.3m分を検出した。北端幅1.8m、南端1.3mを測る。三段から四段掘りを示し、最も深い部分で0.3mを測る。

SD001出土遺物 (Fig. 9)

1は陶器鉢か。復元口径20.4cm。体部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、外面と口縁部内面にかけて淡灰白色の釉がかかる。2・3はいずれも染付碗で高台を欠失する。2は復元口径10.8cm。外面に草花文を描く。3は復元口径9.8cm。同じく外面に草花文を描く。4は土製小玉で、径1.7~1.9cm。

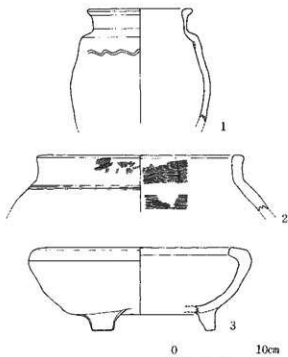


Fig. 7 SK031・032出土遺物実測図 (S=1/4)

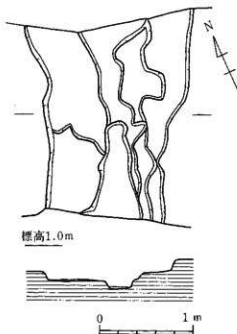


Fig. 8 SD001実測図 (S=1/40)

(3)土墳墓

SP01 (Fig. 10)

縦1.25m、横0.75m、深さ0.3mを測る隅丸長方形の墓墳の底部に幅2cm程の角材を8本使用して長方形の枠を組み、その上に直接遺体を安置する。枠の主軸は、墓墳の主軸よりやや西側へずれている。

遺体は骨が随くなっており、残存状態はよくない。北枕に埋葬され、上半身はうつ伏せで両手を胸前で組み、下半身は両膝を曲げて左側面を上という窮屈な姿勢をとる。長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸助教授の鑑定に依れば、成人男性ではないかと推定される。

遺体の上には径約2cmの丸材10数本を、墓墳の主軸に平行するかたちで敷き並べた後に、埋土を被せる。

土師器小片、瓦質鍋と思われる小片が少数出土したのみである。

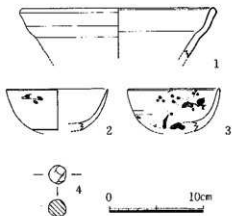


Fig. 9 SD001出土遺物実測図 (S=1/4)

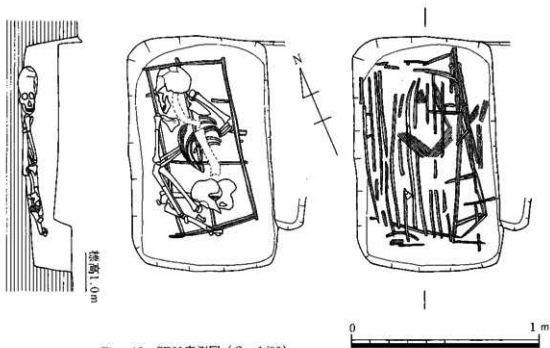


Fig. 10 SP01実測図 (S=1/20)

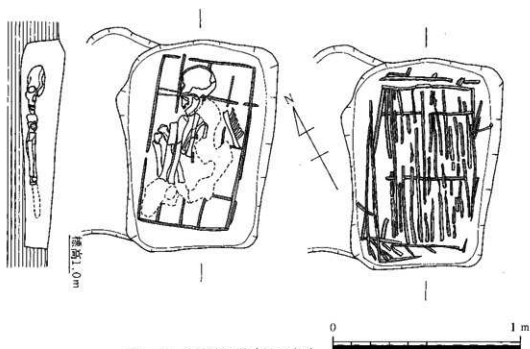


Fig. 11 SP02実測図 (S = 1/20)

SP02 (Fig.11)

SP01の西側に近接して検出された土墳墓で、SP01と同様な形態を示す。縦1.1m、横0.8m、深さ0.25mを測る隅丸長方形の墓壇底部に、幅約2cmの角材11本を使用して長方形の枠を組み、その上に遺体を安置する。枠の主軸は、墓壇の主軸よりやや東側へずれている。

遺体は骨が脆くなっており、残存状態は悪い。左側面を上にして、両腕・両膝を胸前で組む。松下孝幸助教授の鑑定に依れば、男性の可能性が高いということである。

遺体の上には、径2cm程の丸材5本を墓壇の短軸に平行して敷き、更に長軸に平行して20数本を敷き並べて埋土を被せている。

SP01・02は共に同様な埋葬形態を示し、また近接していることからほぼ同時期に埋葬されたものと考えられる。

(4)木棺墓

SP03 (Fig.12)

上部が大幅に削平されており、深さ25cm程度しか残存しない。長径0.9m、短径0.8mの楕円形墓壇に丸桶を設置する。桶は25枚の長方形材と3枚の底板からなり、底板の上位を2条のタガで締めつける。遺体は北枕の坐葬に安置されているが、骨の残存状態が悪く男性としか分からない。

副葬品は、桶の底部近くに青いガラス丸玉が1ヶ、割れた状態で検出された。中心に孔が貫通しており、数珠として使用されていたものか。

棺外の副葬品として、墓墳北側に土師器杯3ヶと小皿6ヶが副葬され、1・3・5・8は底部を上にしていた。1～4は折敷と考えられる薄い木材片の上に置かれ、9はその下から検出された。

S P03出土遺物 (Fig.13)

2・5・6は杯、1・3・4・7～9は小皿であり、いずれも糸切り底で横ナデ調整。杯は口径10.6～10.8cm、器高3.1～3.9cm。小皿は口径6.0～7.0cm、器高1.9～2.4cm。8・9は口縁端部が一部黒色化しており、燈明皿として使用されたものであろうか。

(5)その他の出土遺物

ここでは、柱穴出土遺物と表土除去中、あるいは遺構検出中に検出されたその他の出土遺物を記すことにする。

柱穴出土遺物 (Fig.14)

1はP005出土の土師器小皿で、口径6.4cm、器高1.9cm。糸切り底で横ナデ調整。2はP015出土の瓦質鍋片で、肩部に13弁の菊花文が3ヶ一組押されている。



Fig. 14 P005・015出土遺物
実測図 (S=1/4)

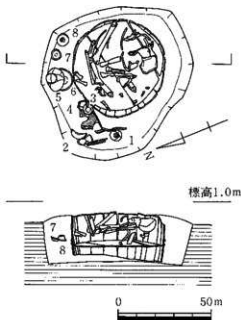


Fig. 12 SP03 実測図 (S=1/20)

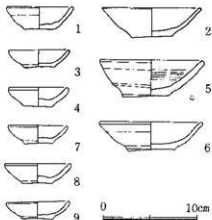


Fig. 13 SP03出土遺物実測図 (S=1/4)

(5)その他の出土遺物 (Fig.15)

1は陶器大皿か。復元口径30.4cm。口縁端部が緩く上方に屈曲し、淡灰白色の釉がかかる。2は播鉢で、高台径12.4cm。高台内部に砂目地が多量に附着する。3・4は陶器碗。3は高台径4.6cmで削り出し高台。暗緑色の釉がかかるが、見込みは蛇ノ目軸ハギ。4は高台径4.2cm。暗灰色の釉をかけ、外面に11弁の菊花文を描く。5は大型の土錘で、全長5.5cm、最大径2.3cm、径0.6cmの小孔が貫通する。表面全体に指ナデ痕が残る。

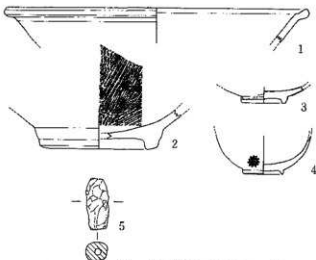


Fig. 15 その他の出土遺物実測図 (S=1/4)

IV. 小 結

今回の調査は調査面積が狭く、遺跡全体を十分に把握できたとは言えない面があるが、調査所見を述べてみたい。

検出された遺構は土壇・溝・小柱穴が大半で、住居跡は検出されず、その他に土壇墓2基と木棺墓1基が確認されていることから、遺跡は集落の周辺部にあたり墓地として利用されていたものと考えられる。

土壇墓2基については、棺桶を使用しない特異な埋葬形態を示しており、このような埋葬形態をもつ土壇墓は白石町では他に確認されていない。これとは同じ形態ではないが、多田遺跡B地区で検出されたSP01は長方形の棺桶を使用するものの、底板を使用しないで竹を平行に敷き並べる方法をとっていた。

長方形の棺桶や丸桶を使用する埋葬形態が一般的と考えられるなかで、この他の各種の埋葬形態が確認されたことは、中世末から近世における葬送を考察するうえで、貴重な資料を得ることができた。

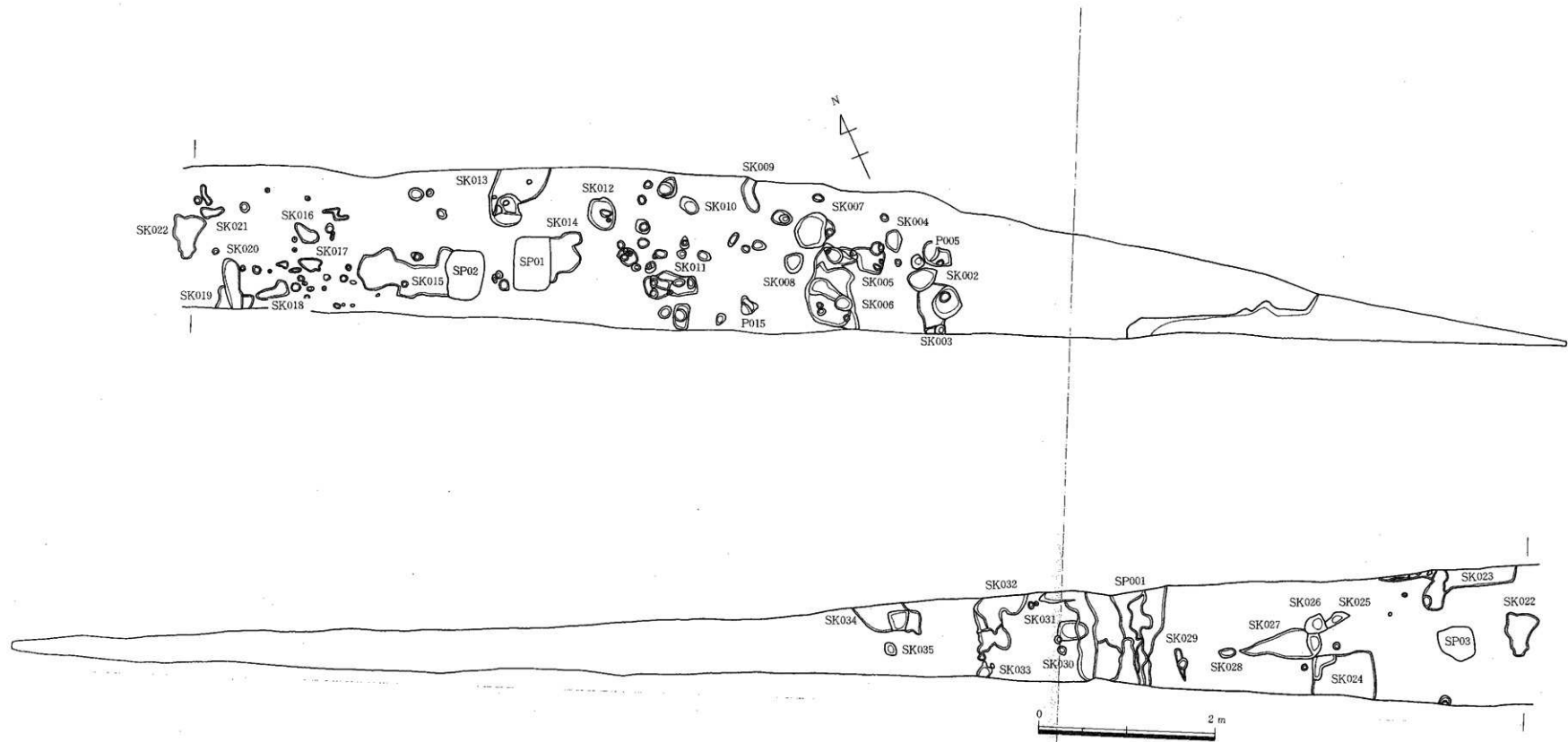
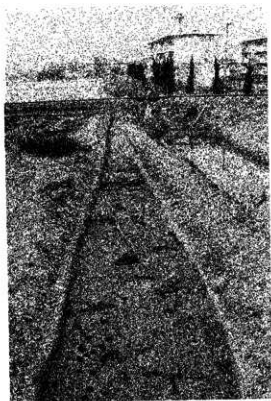
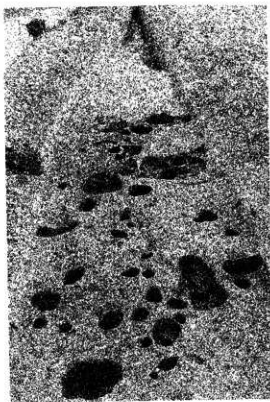


Fig. 16 遺構配置図

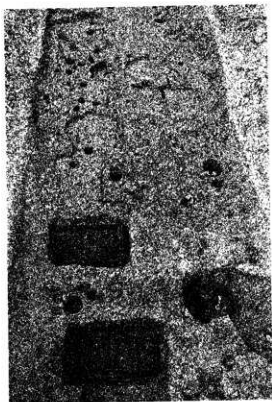
圖 版



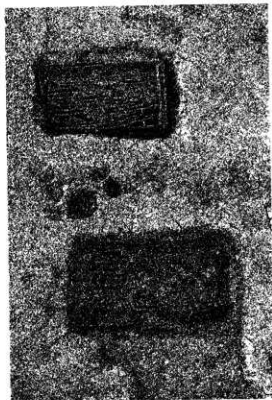
1. 調査地区全景 (東から)



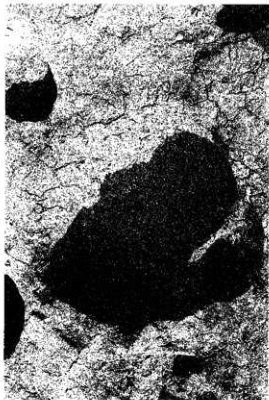
2. 調査地区全景 (西から)



3. S P01・02周辺 (東から)



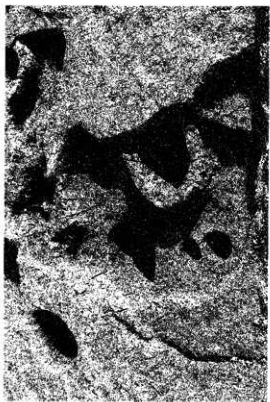
4. S P01・02 (東から)



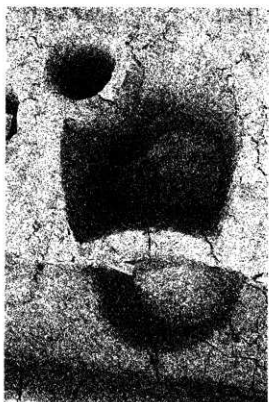
2. S K007 (東から)



4. S K082 (北から)



1. S K006 (南から)



3. S K081 (北から)



2. S D001 (南から)



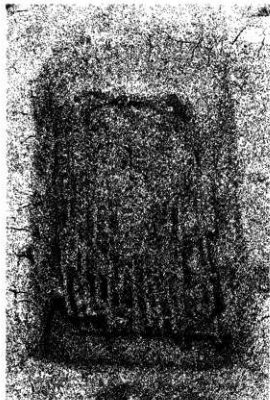
4. P015 (東から)



1. S K032遺物出土状況 (南から)



3. P005 (北から)



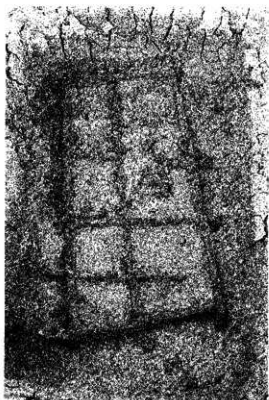
1. S P01 (南から)



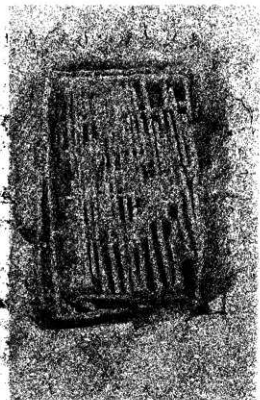
2. S P01人骨出土状況 (南から)



3. S P01人骨上半身 (南から)



4. S P01人骨取上げ後 (南から)



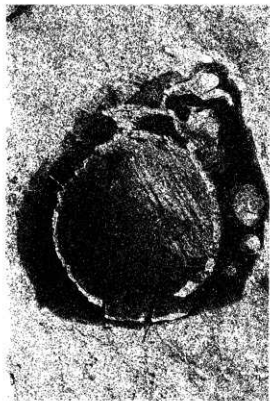
1. S P02 (南から)



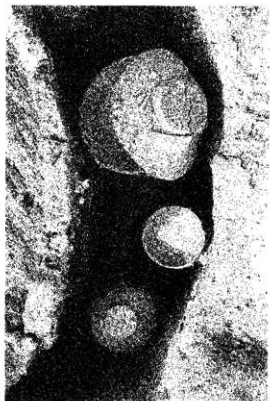
2. S P02人骨出土状況 (南から)



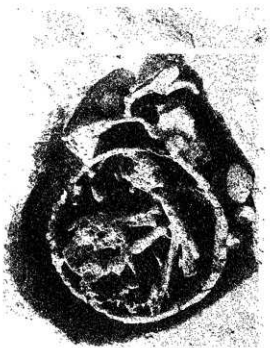
3. S P02人骨取上げ後 (南から)



2. S P03人骨取上げ後 (北から)



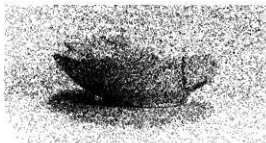
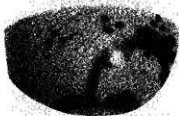
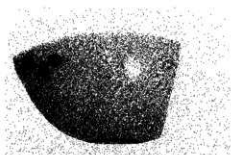
4. S P03墓塚内遺物出土状況 (北から)



1. S P03人骨出土状況 (北から)



3. S P03墓塚内遺物出土状況 (北から)



1. SK002 (4)

2. SK031 (7-1)

3. SK032 (7-3)

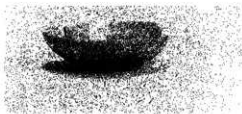
4. SD001 (9-2)

5. SD001 (9-3)

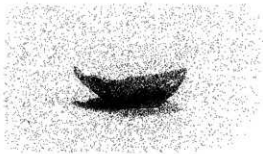
6. SD001 (9-4)

7. SP03 (13-1)

8. SP03 (13-2)



1



2



3



4



5



6



7



8

- 1. S P03 (13-3)
- 2. S P03 (13-4)
- 3. S P03 (13-5)
- 4. S P03 (13-6)
- 5. S P03 (13-7)
- 6. S P03 (13-8)
- 7. S P03 (13-9)
- 8. S P03 (ガラス小玉片)



1



2



3



4



5

- 1. P005 (14-1)
- 2. P015 (14-2)
- 3. 包含層 (15-3)
- 4. 包含層 (15-4)
- 5. 包含層 (15-5)

白石町文化財調査報告書第6集

遠ノ江一本松籠遺跡

平成5年3月31日

発行 佐賀県白石町教育委員会
佐賀県杵島郡白石町大字福田1809番地1

印刷 鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市古枝甲249番地3

